

フランスにおける日本研究

—19世紀後半から第二次世界大戦前夜までの 日仏交流史の一側面—

犬飼 崇人

はじめに

ギヨーム・ポステルの『世界の驚異』（1553年）によって、かつてマルコ・ポーロの伝えた「ジパング」が日本であると同定され、フランスに日本が知られるようになった^[1]。しかし、フランスにおける日本研究は、インド研究や中国研究に比べれば決して早い時期から行われたわけではなかった。状況が変化したのは、日仏修好通商条約の締結、日本からの使節団の派遣などによって日仏の交流が始まった19世紀後半になってからであった。それ以降、日本研究がアジア研究の一分野として発展することとなった。

「フランスにおける日本研究」が研究テーマとなったのは、1970年代からである。日仏会館（Maison franco-japonaise）のフランス学長であったベルナール・フランクによって、フランスにおける日本研究機関の概要が整理された^[2]。また、同じ頃から、日本研究の祖というべきレオン・ド＝ロニ（Léon de Rosny）への着目も始まっており、彼の業績や日本からの使節団との関わりが佐藤文樹によってまとめられ、日本研究の最初期の状況が明らかにされた^[3]。1980年代頃からは、目覚ましい経済発展を遂げる日本に対してフランスで関心が高まり、パリだけでなく地方にも日本研究および日本語教育の機関や学科が増加した。一例として、社会科学高等研究院（École des hautes études en sciences sociales）における現代日本研究所の創設、コレージュ・ド・フランスにおけるフランクの日本文明講座開講^[4]、そして地方ではリヨン第三大学日本語学科を初めとする学科の開設などが挙げられる。こうした動向とともに、日本研究の歴史は全体像がおおよそ把握されるようになった^[5]。それを受けて、1990年代からは個別研究の発表が相次いだ。ロニ研究、日本研究機関の歴史の他に、日本語教育・文学・美術史などを中心として、それぞれの分野の関心に基づいてフランスの日本研究に迫る研究が現れた。1980年代までに築かれた全体像をふまえてテーマが多様化したといえるであろうが、こうした傾向は現在に至るまで続いていると思われる。ただし、2010年代に入ってから、フランス人研究者を招へいた講演会やシンポジウムが日本の大学や学会などで催されるようになっており、フランスにおける日本研究の動向について日

仏間での議論が始まっている^[6]。しかし、これまでの研究を見るかぎり、フランスの研究では日本からの働きかけがあまり考慮されておらず、あくまでフランスの学問の発展としてのみ捉えられがちである。それに対して日本の側では、特定の関心に基づく個別事例に終始してきたように思われる。このため、フランスの日本研究者の置かれた状況や日本研究機関の成りたちをふまえ、研究のネットワークを析出したうえで、日仏相互の関係性を明らかにする必要がある。

そこで本稿では、フランスにおける日本研究について、初めに前史に触れたあと、19世紀後半から第二次世界大戦前夜までの発展を3期に分けて概観し、中核となった研究者、研究機関や学術団体について述べ、それらのネットワークを明らかにする^[7]。そのうえで、日本研究が日仏両国にとって持つ意義を考察しながら、学術文化交流の歴史を展望したい。

I. 前史（～19世前半）：アジア研究の成立

フランスが本格的に海外に目を向けはじめるのは、リシュリユーが宰相を務める時期からである^[8]。この頃のフランスは、グアドループ、マルティニーク両島を領有して植民地の建設を進め、1664年創設のフランス東インド会社をはじめとした特権貿易会社を作って貿易振興を図っていた。その一方で、レヴァント貿易は特権会社によってではなく、民間商人による私貿易として営まれた。さかのぼること1569年にフランス王国とオスマン帝国とのあいだで「居留特許条約（カピチュレーション）」が締結されて以降、フランス船舶およびフランス商人による貿易が営まれるようになり、オスマン帝国の商港にはフランス商社の代理人である「支配人」（régisseur）が居住して取引を執行した。この条約に基づいて、商人だけでなく、手工業者・小売業者・聖職者・修道士などのフランス人がオスマン帝国内の主要な交易都市で居留民団を形成した^[9]。

以降、アジア研究の礎となる組織・機関が形作られていった。まず、オスマン帝国との交易において現地語を話せる者を育成するため、1669年に言語青年学校（École des jeunes de langues）がコンスタンティノーブルに開かれた。それから120余年後、フランス革命のさなかにあたる1795年に東洋言語専門学校（École spéciale des langues orientales）が開校し、①アラビア語、②トルコとクリミアのタタール諸族語、③ペルシア語とマレー語を教える3つのポストが設けられた^[10]。18世紀末のこの時点で「東洋言語」に含まれるのはもっとも東でマレー半島の言語であり、日本語はおろか中国語も入っていなかった。

アジア研究の飛躍は19世紀前半に見られた。一つは、1814年にサンスクリット文学とならんで中国文学の講座がコレージュ・ド・フランスに設けられたことである。これによって、漢字文化圏が研究対象に加わることとなった。次に、1822年のアジア協会（Société asi-

atique)の誕生があった。これは、碑文・文芸アカデミー (Académie des Inscriptions et Belles-Lettres) 内に設立された組織で、マグレブから極東におよぶ広範な知識の発展と普及を目的として、口承および文字文化に対する科学的かつ学際的なアプローチを目ざした。アジア協会は機関誌『アジアジャーナル』 (*Journal asiatique*) によって研究の成果を発信するとともに、『アジア協会年次報告書』 (*Rapports annuels faits à la Société asiatique*) で会の活動を公表した^[11]。同様の組織はイギリスやオランダでは18世紀に設立されており、フランスのアジア研究はそれらの国々に続くかたちとなった。

こうして、中近東からはじまったアジアへの関心は、研究対象を東へと広げながら、19世紀前半にアジア研究の学会成立に至った。まだ日本語を学べる場所はなく、日本研究の専門家も存在しなかったとはいえ、インドや中国などを対象とした東洋学の成立、特に漢文による仏教研究の蓄積が、後の日本研究への入口となっていくこととなる。

II. 初期（19世紀後半）：日本研究の始まり

19世紀後半になって、ペリーの来航から開国へと至った日本と、第二帝政下のフランスが交流を始めた。日本を訪れる宣教師・軍人・外交官といった人々のなかには、日本に関心を持って独自に研究を始める者も現れた。彼らは専門の研究者というわけではなく、本職の傍ら余技的に日本研究を行ったにすぎないが、そうした人々からもたらされた情報や文物が、日本への関心を掻きたてる一助となったことは想像に難くない。その一方で、開国そして明治新政府の樹立にともなって日本からフランスへ向かう人々もいた^[12]。日本研究は、こうした日仏相互の交流のなかで次第に成立を見るのである。

日本研究の最初期には、まず言語の点で困難があった。フランス語によって日本語の知識を得るためには、長らく『日本語文法の基礎』 (*Éléments de la grammaire japonaise*) という辞書が使われた。これは、ポルトガル人宣教師ロドリゲスによる『日本小文典』 (*Arte Breve Lingoa Iapoa*) をシャルル・ランドレスが翻訳・校訂した書である。原書は1620年に出されていたが、ランドレスによる翻訳はようやく1825年のことであった^[13]。フランス人による日本語の辞書は、日本大使通訳を務めたことのあるメルメ＝カション (Mermet-Cachon) によって、1853年から1866年までの日本滞在後に発行された。ただし、その業績が系統的な日本語研究へと発展することはなかった^[14]。

本格的な日本研究の始まりを語るために、ロニへの言及は避けられない。「レオン・ドロニー」の名は、前世紀フランスにおける〈日本学事始〉の先駆者として、日仏文化交流の歴史の起点に立つ推進者の一人として、また日本近代の文学・思想等とのかかわりの面から言えば、かくれたところで明治初期の知識人たちに精神的影響を及ぼした特異な外国人の一

人として、あらためて幾分かの照明をあてるべき興味ある研究対象と、僕には思われる」^[15]と谷口巖が述べているように、1970年代よりロニの重要性が指摘されている。

それでは、ロニとはいかなる人物であったのか^[16]。レオン・ド＝ロニは1837年に生まれ、1852年に15歳で東洋言語専門学校に入学して中国語を学んだ。翌年には中国語に関して複数の論文を発表、その次の年には『日本語研究に必須知識の概要』(*Résumé des principales connaissances nécessaires pour l'étude de la langue japonaise*)という著書を刊行した。日本語の習得にはランドレスの翻訳書を用いたようであるが、既存の研究が存在しないなかでの研究成果からは、その熱心さと早熟ぶりがうかがい知れる。1862年に日本から竹内下野守率いる遣欧使節団がフランスを訪れると、ロニは公式の通訳を務めた。その翌年、東洋言語専門学校に第11番目の言語として日本語の公開講座が開かれると、ロニがこれを担当することとなった。これでようやくフランスでも実用的な日本語を学ぶ場ができたわけである。1868年、東洋言語専門学校に日本語学科が正式に誕生すると、ロニが教授を務めることとなった。1873年に開かれた第1回国際東洋学会議では、自らこれを提唱して議長を務めるなど、日本研究者あるいはアジア研究者としてのロニの地位は確かなものとなっていた。1886年、高等研究実習院(École pratique des hautes études)の第5部に宗教学のセクションが開かれると、「極東の諸宗教」の講義がロニの担当となった。日本語や日本文学を中心として浩瀚な著書を発表しつづけたロニは、1914年(1916年説あり)に歿するまで、フランスにおける日本研究の基礎を築きながら、日本語教育に邁進してきたのであった。

さて、日本に関心を抱いていた若きロニにとって、1862年の使節団の来仏は大いに刺激となったようである。ロニは使節団の公式の通訳を務めたばかりでなく、団員の滞在するホテルに足しげく通っては彼らと談話し、一緒に散歩に出かけてパリの街を案内した。ロニと団員達との交流は、日仏それぞれの知識の交換の場となった。ロニはこの機会に実際の日本語に接し、また言葉や文化に関する疑問を日本人に質すことが出来たのである。また、新聞(『ル・タン』*Le Temps*)への寄稿を通じて日本情報をフランス人に知らしめることも行った。

ロニの日本および日本人への関心が並々な様子には、使節団員らが記録を残している。例えば、福澤諭吉は次のように記している^[17]。

「巴理〔パリ―引用者。以下同様〕の羅尼〔ロニ〕来る。此人は日本語を解し又能く英語に通ず。日本使節巴理に在りし時より時々旅館に來り、余輩と談話せり。使節荷蘭〔オランダ〕え逗留中、羅尼、政府の命を受け、日本人を見る為めハーゲ〔ハーグ〕に來り、留ること二十日許、母の病を聞き巴理え歸り、今度又た日本人を尋んとして別林〔ベルリン〕に來りしに、余輩已に同所を出立せり。由て又た別林より伯德禄堡〔ペテ

ルブルク〕に来れり。別林より伯徳禄堡までの道程八百里。火輪車にて此鉄路を来るに入費四百フランク。唯余輩を見ん為めに来る。欧羅巴〔ヨーロッパ〕の一奇士と云ふべし」。

「一奇士」ロニは、使節団がフランスにいる間ばかりでなく、彼らが他国にいる際にもわざわざ訪ねていくほどの熱の入れようであった。また、1867年から1868年にパリに派遣された栗本鋤雲は、ロニの性格、日本語の能力や知識について、次のように述べている^[18]。

「^マロニー、歳二十余、一個の奇書生なり。〔中略〕唯性議論を好み、善く人を詆毀す。故に人甚だ是を尊ばず。然れども善く我国の史書を読み、能く我国の事跡を記す。『日本史』『日本記』『日本外史』の類、瀏覽遺す無く、旁ら雑書に及べり。現今、巴里〔パリ〕に於て日本学校の教頭を命ぜられ、徒弟頗る多し。屢々予の館を訪ひ、通常言語は故さらに訳者を謝し対話す。但し、語音佶屈、且つ助詞を解せざるを以て、十中纔に三、四を諦聴せり。／^マロニー、鉛筆を以て我の字を書す。字格端正にして且頗る速なり。自から姓名を訳し羅尼と書す。曾て人の囑を受け我国桑蚕耕織の書を訳し、又、彼国新聞紙を訳し共に予に示せり」。

ここでは、ロニの知識が評価される一方で、会話面での困難も記されている。

ロニは日本研究の第一世代というべき立場にあった。この世代が日本について研究するには、ロニがそうしたように、中国語を学んだうえで漢文を介して日本の情報を得るか、シーボルトやメルメ＝カシヨンのような日本滞在経験のある西洋人の著作にあたるしかなかった。日本語の学習についても独学で身につける必要があった。そうであれば、後の学者から研究の厳密さに欠けるという批判が出るのも致し方のないことであろう。ロニが置かれたこのような状況は、他の日本研究の先駆者たちにとっても共通していたはずである。

だが、東洋言語専門学校を中心として日本語教育の場が徐々に整えられた。日本語講座と後の日本語学科の設置についてはすでに言及したが、1871年には栗本鋤雲の養子である栗本貞次郎がここで日本語講師を務めることとなり、これ以後、日本人による日本語教育が継続して行われることとなった^[19]。さらに、1873年に東洋言語専門学校は、言語青年学校との合併により、国立東洋言語学校（École nationale des langues orientales）〔以下、東洋言語学校と略記〕となった。この学校は後に、現在の国立東洋言語文化研究所（Institut national des langues et civilisations orientales : INALCO）となる。コレージュ・ド・フランスが死語の学術的な研究を進めていたのに対し、東洋言語学校は現用語の実践的教育を目指した^[20]。

日本研究が東洋学のなかに地歩を築いたことは、第1回東洋学者国際会議で示された。1873年9月1日からパリで開催されたこの会議では、日本の学術と文明が議題となり、ロニが代表を務めた^[21]。委員会の構成は「表1」のとおりである。日本人出席者として、弁理公使の鮫島尚信、文部大丞の田中不二麿、大学南校中博士の入江文郎、文部中助教にしてパリ東洋語学校講師の今村和郎、野村ナオカグ〔詳細不明〕らがいたことがわかっている^[22]。アジア協会など各種団体からの参加も見られたこの国際会議の開催は、「東洋学」という学問領域が世界的に確立したことを意味しており、日本研究はその一角を占めることになったのである。

表1 第1回国際東洋学者会議委員会

代表	Léon de Rosny	フランス
事務総長	Capitaine Le Vallois	フランス
評議員	Adrien de Longpérier	フランス
	Louis Rochet	フランス
	Joseph Halévy	フランス
	Éd. Madier de Montjau	フランス
	Maspero	フランス
	Ed. Dulaurier	フランス
	Lucien Adam	フランス
	Schoebel	フランス
	Textor de Ravisi	仏領インド
	Houdas	アルジェリア
	Robert K. Douglas	イギリス
	Chavée	ベルギー
	Vasquez-Queipo	スペイン
	Général Meredith Read	アメリカ合衆国
	Dr. Lesbini	ギリシア
	Rév. P. Langenhoff	オランダ
	Salamon	ハンガリー
	Guido Cora	イタリア
	Imamura Warau	日本
	Professeur Blaise	リュクサンブール大公国
	Duchinski et L. De Zéliniski	ポーランド
	Dr. Patkanof	ロシア
	Béchaux	スイス

出典：International Congress of Orientalists, vol. 1, Ganesha, Synapse, 1998, pp. 51-52.

さらに、日本の宗教もしくは美術、それに関連する文物の恒常的な展示の場としてギメ美術館が開館したことにも触れておきたい^[23]。エミール・ギメ（Émile Guimet）の名を冠するこの美術館は、彼が1876年に極東で宗教関係の調査旅行を行った際の蒐集品を公開した。ギメは大学に籍のある研究者ではなかったが、東洋の考古学や宗教学に個人的な関心があった。フィラデルフィア万博を訪れたその足で、日本、中国、インドを旅し、各地で宗教的・美術的物品を集めており、日本では廃仏毀釈運動で捨てられそうになっていた仏像・経典などを手に入れた。これらを収蔵品として、1879年に自らの出身地であるリヨンに「ギメ宗教美術館」を開いた。後に美術館は1889年11月にパリに移転して、今度は「ギメ美術館」としてオープンした。

1920年代までの美術館の展示内容は、ギメの構想に従って次のとおりであった^[24]。一階は、①中国と日本の陶磁器、中国と日本の絵画、②アンティノエ（エジプト）のミイラ。二階は、①インド・チベット、中国の宗教、②インドシナ、シベリアの宗教、③日本の宗教と歴史。三階は、①日本の世俗美術、②古代ギリシア、イタリア、ガリアの宗教、③古代エジプトの宗教、④中央アジア、イスラーム美術、という具合である。広範な地域の宗教的遺物が展示されているだけでなく、日本と中国の陶磁器や浮世絵、工芸品といった、必ずしも宗教的美術品ではない展示品もまた重要な部分を占めていた。ギメが本来目指したのは宗教学を軸とする東洋研究の発展、世界中の宗教的遺物を展示する「宗教美術館」であったが、実際のギメ美術館は、ギメが没するまで中国や日本の比重が大きかったのである。

ところで、ギメ美術館が最初にリヨンで開かれたことは必ずしも偶然ではないように思われる。ボルドーやマルセイユなどが商業的な利害・権益を西アフリカや北アフリカに見出していたのとは異なり、リyonは東アジアにそれがあった。伝統産業として絹織物産業を抱えたこの都市にとって、中国および日本は生糸と蚕卵の調達先であったためである^[25]。日本にとってもフランスは生糸の最大の輸出先であり、1865年から1885年のあいだ、日本の生糸生産量の50パーセントはフランスが購入していた。こうした関係もあって、リヨンで発行されていた絹織物業界の会報には、日本の政治経済の動向だけでなく、同国の歴史や文化についても記事が掲載されていた^[26]。したがって、リyonはフランスの中でも日本との関係が深く、日本に対する関心も高かった都市であったと考えられる。このことは、後の日仏会館設立においても影響を及ぼすことになるであろう。

これまで見てきたように、フランスにおける日本研究は、他の東洋学に比べて新しい領域として生まれた。初期の研究者は、ロニがそうであったように伝統的な東洋研究としての中国学・インド学から転じた人々であった。彼らは限られた文献を手掛かりに研究を進めたが、日本人の渡仏以降は、東洋言語学校を始めとして、日本語の知識や学習機会が広がっていっ

た。そして、1873年に国際東洋学会議が開かれたときには、日本研究はすでに東洋学の一分野として認められるまでになっていた。さらに、ギメ美術館の開館によって日本の文物を恒常的に観賞できる場ができ、日本研究に弾みがついた。ただし、日本からの使節団などの限られた事例を除けば、日本との商業以外の文化交流の機会は多くなく、日本研究における日仏のネットワークはいまだ形成されてはいなかった。

III. 中期（20世紀初頭から第一次世界大戦まで）：極東研究の一角として

日本研究の中期は、およそ20世紀初頭から第一次世界大戦までに相当すると思われる。アジアに植民地を得たフランスは、東洋学を「植民地学」と位置付け、極東という概念をインドシナにも適用し、ここをアジア文明の総合的研究の軸にしようとした^[27]。そこで創設されたのがフランス極東学院（École française d'Extrême-Orient）〔以下、極東学院と略記〕であり、ここが東洋学者のネットワークの中心となった。この時期になると、日本に滞在して研究を進める日本研究の専門家が現れるようになった。

極東学院の淵源は、フランス領インドシナであったサイゴン（現在のベトナム・ホーチミン）にインド＝シナ考古学調査隊が1898年に設立されたことにあった。インドシナ半島の歴史、遺跡、方言などについて知識を深めること、インド、中国、マレーシアなどの諸地域についても文化の科学的探究をめざすこと、図書館・博物館を創設すること、研究業績の出版についての基礎を作ることが調査隊の目的とされた。1901年には極東学院へと改組されて、翌年にハノイに移転した^[28]。最初の年報には、インドシナにかぎらず極東の社会生活全般を研究することが謳われている^[29]。

極東学院については、後の東洋史研究者から「フランスの若い東洋学者を育てる大きな揺り籠」^[30]や、「フランス東洋学の淵藪」^[31]という評価がなされている。というのも、フランスの大学で歴史学や法学などを修めた学生や高等研究実習院の卒業生から研究員が選抜され、ここに派遣された。そして、彼らが東洋言語学校、コレージュ・ド・フランス、パリ大学、ギメ美術館、アジア学会、インドシナ学会といった東洋学研究機関・学会における主要な人物となったためである。

そのなかには日本研究者、もしくは後に設立される日仏会館と関わりを持つことになった者も含まれていた。日仏会館との関係については後述するが、日本研究者としてはノエル・ペリ（Noël Péri）とクロード・メートル（Claude Maitre）という二人の人物が重要である。彼らは、この時期の日本研究をリードする存在であった。

ペリは1865年生まれ、1888年にパリ外国宣教会付属の神学校を出て司祭となった人物である^[32]。翌年には来日し、東京、名古屋で日本語を学習したあと、1890年、松本に司祭と

して赴任した。その後、東京音楽学校教師としてオルガンや和声法、作曲などを教え、1902年にパリ外国宣教会を脱退して日本研究に専念することとなった、研究者としては異色の経歴の持ち主であった。能楽・狂言、文学、仏教、音楽などを研究した彼が極東学院の연구원となったのは1907年のことで、たびたび日本に出張して日本の東洋研究者たちと交流を重ねた。彼は1922年に自動車事故で亡くなるが、その訃報に接した歴史学者の石田幹之助は追悼文において、東洋学者、特に日本学者としてのペリの名がよく知られていること、極東学院の年報に「敦盛」などの能を訳出し、日本の学者による東洋研究や日本研究の論著を西欧の学会にさかんに紹介していたことを記している^[33]。

メートルは1876年生まれ、1898年から奨学生として日本で学び、日本美術の専門家として、1901年に極東学院の給費生に任ぜられてインドシナへ渡った人物である。1908年から極東学院の学院長を務めたあと、1914年に帰国して従軍し、第一次世界大戦後の1923年にギメ美術館の副館長に就任した^[34]。彼の経歴は、極東学院がまさに「フランスの若い東洋学者を育てる大きな揺り籠」であったことを示しているといえよう。

極東学院はアジア研究の最先端を担った。日本研究は主流にならなかったとしても、来日経験のあるメートルやペリといった専門家が極東学院に席を占め、研究成果を発信した。ただし、この段階の日本研究は、日本の研究者・研究機関と公的な関係をまだ持っていなかった。

IV. 後期（両大戦間期）：日本との連携

日本研究の後期にあたる両大戦間期には、政界・財界・官界における日仏相互のコネクションを活用した研究・交流機関が設立され、既存の機関を組みこんだネットワークが形成された。例えば、日仏会館が東京に創られ、ハノイの極東学院やパリ大学日本学研究所（Institut d'études japonaises de l'Université de Paris）〔以下、日本学研究所〕との交流を深めるなど、フランス本国、インドシナ植民地、日本のそれぞれの拠点結びついた。したがって、この時期にはフランス側の動向だけでなく日本からの働きかけが無視できないものとなった。

日仏の学術文化交流の拠点として代表的な機関は、日仏会館であろう。その設立経緯は1917年にさかのぼる^[35]。フランス語普及を目的として東京に「フランス学院」を創設する提案が、駐日フランス大使から本国の外務省に持ちこまれた。この意見は植民地省および公教育芸術省へと伝わり、後者からリヨン・アカデミー管区長のポール・ジュバン（Paul Joubin）が派遣されることとなった^[36]。彼にはリヨン大学の東洋言語研究者モーリス・クーラン（Maurice Courant）が随行した。1919年8月に、日仏会館設立に向けた会合が渋谷栄一

の自宅で設けられ、犬養毅、古市公威、富井政章、穂積陳重、阪谷芳郎らの学者や政治家たちが参加した。1921年11月、ポール・クロードル（Paul Claudel）が駐日フランス大使として着任。彼としては、フランス語の普及よりも、フランス人研究者が日本で研究できる施設を望んだ。そうしたクロードルの要求と、フランスとの文化交流の場としたい日本側の希望のすり合わせがあったのであろう。結局のところ、極東学院のような研究機関を想起させる「フランス学院」でもなく、フランス文化普及の拠点という印象を与える「フランス会館」でもなく、1922年10月の設立企画書では「日仏会館」の名称へと落ちついた。そして、1924年12月、日仏会館が正式に設立された。初めは永田町の村井吉兵衛の屋敷に置かれたが、1929年からお茶の水に移転しており、1995年に恵比寿に移るまでここに存続した。

日仏会館は、現在と同様、フランス側と日本側それぞれが長を据えた。すなわち、一方に文化学術活動の活性化を目的とするフランス事務所があり、トップにフランス人のフランス学長（Directeur français）を置き、フランス政府からの出資を受けた^[37]。他方で日本側は日仏会館施設の管理・運営にあたり、皇族を総裁（Président）に戴き^[38]、日本人の理事長（Président du Conseil d'Administration）が実務の中心を担った。歴代理事長は〔表2〕の通り、実業家、官僚、学者、政治家など、いずれも各界の大物が務めた。

表2 歴代日仏会館理事長

爵位	氏名	期間
子爵	渋沢栄一	1924年3月～1931年11月
男爵	古市公威	1932年4月～1934年1月
男爵	富井政章	1934年4月～1935年9月
男爵	若槻礼次郎	1935年4月～1946年12月

歴代のフランス学長および研究員には多様な立場の人物が名を連ねている（〔表3, 4〕）。初代フランス学長のシルヴァン・レヴィ（Sylvain Lévi）はインド研究・仏教研究の大家であった（就任の1926年までは、仏教研究・アフガニスタンの考古学調査で知られるアルフレッド・フーシェ Alfred Foucher が代理を務めた）^[39]。ほとんどは日本研究と関わりの薄そうな者であるが、日本研究者として著名なのは1925年から研究員であったシャルル・アグノエル（Charles Haguenauer）である。彼は古代日本の宗教史を中心に、民族学、考古学、歴史学などの幅広い分野において言語学的・文献学的なアプローチを行ったことで知られる。1932年以降は、東洋言語学校の第3代教授として日本研究者を数世代にわたって養成した。セルジュ・エリセーフ（Serge Elisseeff）と並んで両大戦間期の日本研究をけん引し、第

二次世界大戦後の日本研究の基礎を築きあげた人物であった^[40]。また、当初のフランス側の意図が日仏会館を極東学院の出張所とすることにあったとすでに述べたが、オーブアンとガスバルドンら極東学院の関係者も日仏学院の研究員となった^[41]。

なお、日仏会館の設立にあたって人材がリヨンから派遣されたことは特筆すべきであろう。前述のとおり、このフランス第二の都市は日本との商業上の関係が深かったが、日本人の学者や外交官らとの人的つながりの強かった都市でもあった。日仏会館創立において法学者の役割が大きかったことはジャリュゾーによって指摘されているとおりであるが、法学を学ぶ者がリヨンを留学先として選ぶことは少なくなかった。実際、理事長を務めた富井政章はリヨンで学び、ギメとも親交を結んでいた^[42]。なお、民法の父ともいわれる梅謙次郎が博士号を取得したのもリヨン大学においてであった^[43]。また、1884年からリヨンに日本領事館が置かれたこともあって、日本の外交官も地元名士や政治家たちと交流を持っていた。領事であった木島孝蔵は、『北斎』、『日本精髓試論』、『仏教美術』などの著作のある美術史家アンリ・フォション（Henri Focillon）と親しくしており、1916年に「リヨン日仏委員会」を共に立ちあげた。日仏の外交関係の強化を目的とするこの委員会は、市長エドゥアル・エリオ（Édouard Herriot）を委員長とし、既述のジュバンやクーランらも名を連ねていた。このような関係を築いたうえで帰国した木島は、日仏会館創設に尽力することとなった。その後も、1920年から1927年まで領事を務めた若月馥次郎が、リヨンで日本文化を紹介する取り組みを積極的に進めた。彼の名は「若月通り」（Rue Wakatsuki）として今日もリヨンの街路に残されている^[44]。このように、リヨンは商業だけでなく、法学を中心とする学術、外交などの面で日本と結びつきの強い都市であり、日仏会館の旗揚げにあたって人的な基礎

表3 歴代日仏会館フランス学長

期間	氏名		備考
1926年9月～ 1928年5月	シルヴァン・レヴィ	Sylvain Lévi	コレージュ・ド・フランス教授
1928年10月～ 1929年7月	ルイ・ブラランゲム	Louis Blaringhem	フランス学士院会員、植物学者、パリ大学科学部教授
1930年11月～ 1933年3月	ジョゼフ・アッカン	Joseph Hackin	ギメ美術館主任学芸員
1933年10月～ 1936年6月	レオン・ジュリオ・ド・ラ・モランディエール	Léon Julliot de la Morandière	フランス学士院会員、パリ大学法学部教授
1936年11月～ 1939年6月	レオン・マゾー	Léon Mazeaud	パリ大学法学部教授
1939年11月～ 1946年8月	フレデリック・ジョウオン・デ・ロングレ	Frédéric Joïon des Longrais	古文書学校教授、高等研究実習院長

表4 日仏会館の研究員

期間	氏名	備考
1925年12月～ 1932年1月	シャルル・アグノエル Charles Haguenaer	ソルボンヌ日本語日本文明名誉教授, 高等研究実習院長
1926年2月～ 1927年3月	フランシス・リュラン (夫妻) Francis Ruellan et Mme Ruellan	レンヌ大学海洋問題研究センター所 長
1926年6月～ 1927年3月	マルセル・ルキアン (夫妻) Marcel Requien et Mme Requien	法学博士
1926年7月～ 1930年6月	ポール・ドゥミエヴィル (夫妻) Paul Demiéville et Mme Demiéville	フランス学士院会員, コレージュ・ ド・フランス中国学名誉教授, 日仏 会館臨時学長
1926年9月～ 1927年9月	エリー・オーブアン Elie Aubouin	フランス極東学院メンバー
1927年3月～ 1929年12月	ヨハネス・ラーダー (夫妻) Johannes Rahder et Mme Rhader	文学博士, ユトレヒト大学教授
1929年6月～ 1932年8月	ロジェ・ピエヴァシュ (夫妻) Roger Piedvache et Mme Piedvache	数学教授資格保持者
1930年11月～ 1931年3月	ジャン・カルル Jean Carl	フランス政府認定建築士
1930年6月～ 1931年2月	エミール・ガスパルドン Emile Gaspardone	フランス極東学院メンバー
1932年2月～ 1936年9月	ジャン・モット Jean Motte	理学博士, 医学博士, モンペリエ大 学教授
1932年3月～ 1939年2月	ジョルジュ・ボンノー Georges Bonneau	文学博士
1932年6月～ 1934年9月	ジャン・シャバス (夫妻) Jean Chabas et Mme Chabas	オルレアン大学教授
1935年3月～ 1936年6月	ヴィクトル・ベルジェ＝ ヴァション Victor Berger-Vachon	アルジェ法学部教授
1935年6月～ 1939年1月	マルセル・ロベール Marcel Robert	大学教授資格保持者, 日仏会館臨時 学長
1936年8月～ 1938年2月	ジョルジュ・パテイ Georges Patey et Mme Patey	医学博士, バリ大学医学部小児科診 療所長
1939年5月～ 1940年6月	フロラン・ギラン Florent Guillaín	フランス政府認定建築士
1941年11月～ 1947年9月	ジャン・ドラン (夫妻) Jean Drans et Mme Drans	元バンコク王立大学教授, 日仏会館 臨時学長

出典:『日仏文化』30, 1974年, pp.8-9.

を提供しえたのである。

さて、日仏会館と同様に、両大戦間期に誕生して現在まで存続する機関として日本学研究所がある。まずは研究所が置かれたパリ日本館の設立について述べておきたい。国際大学都市計画として、各国や資産家から寄金を得てパリ南西部の要塞跡地に各国学生会館を順次建てる計画があり、建設は1921年から始まっていた。その中心となった政治家がアンドレ・オノラ（André Honnorat）で、1920年から1921年に公教育芸術大臣を務めたこの人物が、1950年の死まで計画の代表を務めた^[45]。この一環として日本館を建設する動きがあったが、資金の問題が生じた。そこで、西園寺公望の元公設秘書であった松岡新一郎、ならびに外務省欧米局長であった広田弘毅が資産家である薩摩治郎八を訪ね、彼から建設資金200万フラン（維持費として100万フラン）の提供を受けることの了解を取りつけ、日本館建設が実現することとなった^[46]。

日本学研究所は、三井合名会社からの寄金によりパリ大学の機関として1935年に設立された。先述のとおり研究所は日本館内にあるのだが、それぞれ独立した組織である。日本の学術文化紹介の窓口として中継的役割を担い、日仏間の学術文化交流に貢献すること、図書の寄贈などを通じて日仏会館と連携すること、学位論文出版へ資金を提供するなどの援助を行うこと、国立図書館をはじめとするフランス国内12館の図書館を対象とした「在パリ図書館所蔵和図書総合目録」を作成することなどを目的とした。蔵書収集については、日本館計画の当初から館内に日本文化関連の図書館を設けて研究者の利用に資する考えがあり、これを具体化したといえる。出版援助については、物理学者の湯浅年子、スタンダール研究家の片岡美智らの学位論文がこの援助を受けて実際にフランスで刊行された。目録は、1938年初めの時点で3000タイトルの図書、2万1000枚のカード目録が作成されたが、最終的に財政難により中断された^[47]。日本学研究所が全体として目ざすところは日本研究の活発化にあったといえよう。

この組織もまた、日本との共同により創設された。第1回の理事会の顔ぶれは、[表5]のとおりである。日仏会館のフランス学長および研究員と見比べると、初代から第3代のフランス学長を務めたシルヴァン・レヴィ、ルイ・ブラランゲム、ジョゼフ・アッカンに加え、研究員であったシャルル・アグノエルの名も見られる。また、アンリ・カピタン（Henri Capitant）は法学者であって、1931年に日仏会館に招聘されて日本の各所で講演を行ったことがあった^[48]。蔵書の融通ばかりでなく人事面からも日仏会館とのつながりが明瞭である。

日本学研究所は、1938年に三井合名会社からの運営資金が途絶することで活動を停止した^[49]。研究所という名を冠してはいるものの、業務内容から判断すると日仏の学術交流という性格が強かったように思われる。設立にあたって日仏会館とのネットワークが下敷きと

表5 パリ大学日本学研究所 第1回理事会

理事役員	佐藤尚武		名誉理事長，駐仏日本大使
	セバスチャン・シャルレティ	Sébastien Charléty	パリ・アカデミー管区長
理事長	アンドレ・オノラ	André Honnorat	上院議員
副理事長	アンリ・カピタン	Henri Capitant	パリ大学教授
	シルヴァン・レヴィ	Sylvain Lévy	パリ大学教授
	三谷隆信		日本大使館一等書記官
理事会 委員	ミシェル・ルヴォン	Michel Revon	パリ大学教授
	シャルル・アグノエル	Charles Haguenauer	東洋言語学校教授
	ルイ・ブラランゲム	Louis Blaringhem	パリ大学教授
	ジョゼフ・アッカ	Joseph Hackin	ギメ美術館長
	薩摩治郎八		
	他		国立図書館，国立自然博物館の館長や日仏協会の代表など
書記	山内		日本館館長
経理担当	モーリス・ギュイヨ	Maurice Guyot	パリ大学事務総長

出典：松崎碩子（2012）「パリ大学日本学研究所」和田桂子・松崎碩子・和田博文編『満鉄と日仏文化交流誌「フランス・ジャポン」』ゆまに書房，pp.226-227.を元に作成

なっていたように，日仏共同の学術文化交流機関が相互に連携することとなった。

最後に，両大戦間期の日本研究について，その他の変化を概観しておきたい。1920年，パリ第7大学日本語学科に，後に日本学研究所の理事会委員となるミシェル・ルヴォン（Michel Revon）が日本語講座を開講した^[50]。1932年にはアグノエルが日仏会館から戻り，東洋言語学校の日本語学科第3代教授に就任，同じ年に高等研究実習院第5部門が設立され，エリセーエフが着任した。こうして，両大戦間期になってフランスの日本研究はますます活発になっていった。

だが，ギメ美術館では1932年以降，日本関係の展示が縮小された。すなわち，一階はクメールやインドシナの美術，二階は①インドとジャワの美術，②アフガニスタンの美術，③中央アジアの美術，④チベットの美術，三階は①中国絵画と陶磁器，②日本美術という具合の配置になった。日本関係の展示はかつてより目立たなくなり，エジプトやギリシア，イタリア，フランスの古代宗教美術展示が姿を消した。これはギメ美術館を国有化してルーヴル美術館のアジア美術部門とする計画に従ったためでもある。ただし，藤原貞朗も指摘するように，時代・地理的に世界全体を網羅する美術史概説書が編まれるなかで，クメール美術や日本美術も，フランスやイタリアの美術と同じ書物の中で語られるようになったのであり^[51]，美術史において日本研究への関心が失われたわけではなかった。

極東学院では1930年代に変化があった。この研究機関は、1920年に植民地大臣アルベール・サローのもとで組織が改編され、博物館・図書館が拡大し、仏領インドシナ各地に研究組織が誕生していた。近隣諸地域に対する研究員の派遣も頻繁に行われ、日本は中国に次いで派遣の多い地域であった^[52]。だが、メートル、ペリといった有力な研究者が1920年代に相次いで世を去ったあとは、極東学院においてアンコール考古学の重要性が増していったことも相まって、日本研究が下火になっていったのである^[53]。あるいは、日本学研究所にアグノエル、高等研究実習院にエリセーエフといった具合に、優れた日本研究者がパリで活躍するようになったことで、日本研究における極東学院の位置が低下したともいえるかもしれない。

これまで見てきたとおり、両大戦間期の日本研究は、日仏両国の人的交流の活発化、それに基づく文化交流、および学術研究機関の設立のうえに展開した。そして、日仏会館や日本学研究所などは、以前からあった極東学院なども含め、人的な移動や情報交換などの点で相互に連携しあったのである。そこには、研究者同士の関係にとどまらず、法学や外交のコネクションなどをベースとして、各界の重要人物たちが深くかかわっていたのであった。

おわりに

フランスにおける日本研究について、19世紀半ばから第二次世界大戦前までの時期を三つに区分して検討してきた。江戸時代の日本とフランスは直接の接触がなかったこともあって、フランスの研究者が日本の情報を知るには漢文かスペイン語やポルトガル語などの外国語しか手段がなかった。ところが、日本との交流が始まることで、日本研究はインドや中国などの東洋学の蓄積のうえに成立した。とはいえ、19世紀のあいだは日本との連携がほとんどなく、フランス国内での研究にとどまっていた。

20世紀になると東洋学が実践的な植民地学として位置づけられ、とりわけインドシナ植民地への学術的関心が高まった。そこから発展した極東学院は、フランスのアジア研究の拠点、アジア研究者たちの結節点ともなり、著名な日本研究者が集うこととなった。彼らは日本人研究者とも交流を持ったが、組織的な学術協力の体制はまだ整っていなかった。その意味で、20世紀から第一次世界大戦までは初期の日本研究と質的な変化があったわけではなかった。

ところが、両大戦間期になると日仏の学術文化交流が促進された。それは、日仏会館の設立に負うところが大きく、日本側にフランスの学術的な拠点が築かれたことで、既存の機関との連携が緊密化かつ多重化した。ギメ美術館、日本学研究所、極東学院、日仏会館の人的移動がそれを物語っている。その際、日仏会館のフランス学長や研究員がそうであったよう

に、日本研究者ばかりでなく、アジア研究者はもちろん、法学やその他の学問に携わる者、さらには学問の世界を超えた各界の人物たちがそのネットワークの構築に関わっていた。日仏両国関係の深化にともない、人的つながりも強化されたことで、日本研究に対しても多様なリソースが注ぎこまれることとなったのである。

年表

一般（日仏）	年	日本研究
支倉常長一行，サン＝トロペに上陸	1615	
コルベールによるアカデミーの設置	1663	
	1669	言語青年学校設立
フランス革命（～1799）	1789	
	1795	東洋言語専門学校設立
第一帝政（～1815）	1804	
	1814	コレージュ・ド・フランスに中国文学，サンスクリット文学の二講座
復古王政（～1830）	1815	
	1822	アジア協会設立
	1825	フランス語による初の日本文法書
第二帝政（～1870）	1852	
日仏修好通商条約	1858	
竹内下野守遣欧使節団	1862	
	1863	東洋言語専門学校でロニによる日本語の公開講座
ロッシュ，駐日公使として着任。池田筑後守遣仏使節団	1864	
第二回パリ万博。徳川民部大輔遣仏使節団。大政奉還	1867	
第三共和政（～1940）	1870	
岩倉遣欧使節団	1871	栗本貞次郎，東洋言語専門学校で日本語を教授（～1872）
富岡製糸場創業	1872	
	1873	第一回国際東洋学会議。合併により国立東洋言語学校が誕生
	1876	ギメ来日
	1879	ギメ宗教美術館設立（リヨン）
パリに日本総領事館設置	1880	
リヨンに日本領事館設置	1884	

フランスにおける日本研究（犬飼）

一般（日仏）	年	日本研究
	1886	学習院，プロスペル・フォルテュネ・フークをフランス語教師として雇用
フランス領インドシナ連邦成立	1887	
	1889	ギメ宗教美術館がパリへ移転してギメ美術館となる。パリ来日
日清戦争（～1895）	1894	
	1898	メートル来日
	1900	神戸日仏協会。パリ日仏協会
	1901	フランス極東学院設立（サイゴン）
	1902	フランス極東学院がハノイに移転
日露戦争（～1905）	1904	
パリの日本公使館が大使館に昇格	1906	
第一次世界大戦（～1918）	1914	
	1920	パリ大学に日本文明講座が開設（アグノエルが担当）
クローデル，駐日フランス大使として着任	1921	
	1923	『日本と極東』（ <i>Japon et Extrême-Orient</i> ）発刊
	1924	日仏会館設立。東京外国語学校教師としてアグノエルが着任
	1929	ギメ美術館国立化。パリ国際大学都市日本館（薩摩財団竣工）
満洲国建国	1931	
	1932	高等研究実習院第5部門にエリセーエフが就任
	1935	パリ大学日本学研究所
日中戦争開始	1937	ギメ美術館とインドシナ美術館の統合完了
第二次世界大戦開始	1939	

注

- [1] 岸野久（2009）「ジパングとジャポンの同定者ギョーム・ポステル：フランスにおける日本研究の端緒」『アジア遊学』127, pp. 24-26.
- [2] FRANK Bernard (1973), «Cinquante ans d'orientalisme en France (1922-1972): Les études japonaises», *Journal Asiatique*, pp. 255-295. フランクはほぼ時を同じくして日本語でも同様の内容を発表している。フランク，ベルナール（1972）「フランスにおける日本研究：その回顧と現況」『びぶろす』23-10, pp. 1-11.
- [3] 佐藤文樹（1972）「レオン・ド・ロニー：フランスにおける日本研究の先駆者」『上智大学仏語・仏文学論集』7, pp. 15_a-1_a.

- [4] フランク, ベルナル (1981)「宗教と文学の鏡を通してフランスから見た日本: コレージュ・ド・フランス日本文明講座開講講演」『文学』49-1, p. 52. 社会科学高等研究院とコレージュ・ド・フランスに日本研究が加わったことから, 森川甫はこの頃を日本研究の画期と見なしている。森川甫 (1983)「フランスの日本研究: 歴史と現状」『関西学院大学社会学部紀要』46, p. 48.
- [5] 特に森川, 前掲論文。概略としては, 1990年代の論考であるが, 河合満朗が研究機関や研究者をまとめている。河合満朗 (1994)「フランスにおける日本研究」『日本研究』10, pp. 101-112.
- [6] 管見のかぎりでは4つの講演会・シンポジウムが行われている。2010年7月に国際交流基金事業講演会として明治大学においてダニエル・ストリューヴ (パリ第7大学) の講演「フランスにおける日本学の現在」, 2014年2月に富山大学人文学部においてシンポジウム『フランスにおける日本学 日本におけるフランス学』, 2015年5月に日仏図書館情報学会においてジャン＝ミシェル・ビュテル (フランス国立東洋言語文化大学, 日仏会館研究員) による講演「ジャポノロジーのひび割れ: 現代フランスにおける日本研究のテーマと方法」, 2015年10月に東洋大学において東洋大学ストラスブール大学協定締結30周年記念研究・学術交流プログラムとして『フランスにおける日本学: ストラスブール大学との協定30周年を記念して』など。
- [7] マセによれば, フランスでは一人の研究者が総体的に日本文化全般をあつかう「日本学」(japonologie) というより, 個別のテーマを集中的にあつかう「日本研究」(études japonaises) という呼びかたが現状にふさわしい。このため本稿では「日本研究」で統一する。マセ, フランソワ (2000)「フランスにおける日本研究」マセ・美恵子訳『環』3, p. 274.
- [8] 福井憲彦編 (2001)『フランス史』山川出版社, pp. 211-218.
- [9] 深沢克己 (2007)『商人と更紗: 近世フランス＝レヴァント貿易史研究』東京大学出版会, pp. 55-98.
- [10] INALCO, «Une riche histoire», (<http://www.inalco.fr/institut/presentation-politique-institut/histoire-riche>), 2016年3月9日アクセス。以下, INALCO と略記。
- [11] Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, «SOCIÉTÉ ASIATIQUE», (<http://www.aibl.fr/societe-asiatique/?lang=fr>), 2016年4月9日アクセス。
- [12] フランスに留学する日本人は1871年から増加した。松原秀一 (1986)「レオン・ド・ロニ略伝」『近代日本研究』81, p. 49.
- [13] 辞書の翻訳としては, 1861年に『日本語文法試論』(*Essai de Grammaire Japonaise*), 1862年から1868年に『和仏辞典』(*Dictionnaire Japonais-Français*) がレオン・パジェス (Léon Pagès) によって刊行されている。関正昭 (1997)『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク, p. 242.
- [14] 河合, 前掲論文, p. 101.
- [15] 谷口巖 (1978)「レオン・ド・ロニ一年譜及び著作目録ノート: その出生より明治6年まで (1837~1873)」『愛知教育大学研究報告 人文科学・社会科学』27, p. 1. この後, 1984年に, 使節団のメンバーたちからの書簡をロニ自身が貼った手帳が見つかり, 日本人との交友に新たな光が投げられるようになった。松原, 前掲論文。
- [16] 以下, 略歴については, 関, 前掲書, p. 242, 松原秀一 (1974)「フランス東洋学とレオン・ド・ロニ: 福沢諭吉との関係において」『福沢手帖』2, pp. 3-9, 白井智子 (1996)「レオン・ド・ロニの眼から見た日仏交流とフランスにおける日本語学の始まり」『神戸海星女子学院大学・短期大学研究紀要』35, pp. 280-290, 佐藤, 前掲論文, pp. 1-15 を参照。
- [17] 福澤諭吉 (1969-71)「西航記」『福澤諭吉全集』第19巻, 岩波書店, p. 43.

- [18] 栗本鋤雲（2009）「暁窓追録」井田進也校注『幕末維新バリ見聞記』岩波書店, p. 165. 栗本は、フランス公使レオン・ロッシュの側近ともいうべきメルメ＝カションと親交があつてフランス語にも堪能であった。佐藤, 前掲論文, p. 9.
- [19] 松原（1986）, 前掲論文, pp. 48-49.
- [20] INALCO
- [21] 国際会議は、この後、第2回が1874年ロンドン、第3回が1876年サント＝ペテルブルク、第4回が1878年フィレンツェでという具合に2年ないし3年おきに開かれた。1951年の第22回イスタンブール会議まではすべてヨーロッパの都市で開催された。佐藤, 前掲論文, p. 11.
- [22] ただし、第2回目以降の会議に日本人は多くない。*International Congress of Orientalists*, 11 vols., Ganesha, Synapse, 1998. および高田時雄（1998）『復刻版 国際東洋学会会議記録別冊付録 国際東洋学会会議について』Edition Synapse.
- [23] 以下、ギメ美術館については、長谷川＝ソケール・正子（2012）「ギメ美術館と『日本文化』」和田桂子・松崎碩子・和田博文編『満鉄と日仏文化交流誌「フランス・ジャポン」』ゆまに書房, pp. 267-284, 藤原貞朗（2008）『オリエンタリストの憂鬱：植民地主義時代のフランス東洋学者とアンコール遺跡の考古学』めこん, pp. 11-27, pp. 184-185.
- [24] 藤原, 前掲書, pp. 201-203.
- [25] LAFHEY John F. (1976), "Lyonnais Imperialism in the Far East 1900-1938," *Modern Asian Studies*, 10-2, pp. 225-231.
- [26] ポラック, クリスチャン（2002）『絹と光 Soie et Lumières』アシェット婦人画報社, pp. 26-47.
- [27] 藤原, 前掲書, p. 124
- [28] 伊東隆夫（1955）「フランス東洋学の足跡」『史学研究』53, pp. 49-50.
- [29] 学問領域としては、政治史、制度史、宗教史、文学史、考古学、言語学、人類学などが挙げられている。*Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, tome.1, 1901, p. ii.
- [30] 福井文雅（1997）「フランス東洋学の揺り籠：極東学院」『月刊しにか』8-8, pp. 2-5.
- [31] 伊東, 前掲論文, p. 59.
- [32] 以下の経歴は、杉山直治郎（1944）「ノエル・ペリーの生涯と業績」『日仏文化』新9号, pp. 1-253. を参照。
- [33] 石田幹之助（1986）「ノーエル・ペリ教授の訃」『石田幹之助著作集4 東洋文庫の生まれるまで』六興出版, pp. 302-304.
- [34] 長谷川, 前掲論文, pp. 274-280.
- [35] 以下、設立の経緯については中條忍（2014）「ポール・クロードと日仏会館」『ふらんす』89-1, pp. 12-14, SABBAN François, «Une petite histoire de la MASON FRANCO-JAPONAISE» (<http://www.mfj.gr.jp/web/historique/MFJ-Historique-FS-2008.html>), 2016年3月9日アクセス。
- [36] ジュバンの肩書が日本語ではしばしば「リヨン大学総長」と書かれるが, Recteur de l'Académie de Lyon は大学の長ではなく公教育芸術省の官僚である。この時期のフランスの教育行政では、数県を一つのアカデミー管区として全国を区分し、その長としてアカデミー管区長（Recteur）を置いた。マルケや、彼の参照したブシェの論文では、ジュバンが Recteur de l'Académie de Lyon であると記載されている。MARQUET Christophe (2014), «Le developpement de la japanologie en France dans les années 1920: autour de la revue Japon et Extrême-Orient», *Ebisu*, 51, p. 36, BOUCHEZ Daniel (1983), «Un défricheur méconnu des études extrême-orientales: Maurice Courant (1865-1935)», *Journal Asiatique*, 271, note. 118.
- [37] 1936年頃に10万円の出資を受けた。和田桂子（2012）「満鉄と日仏文化交流誌『フランス・

- ジャポン』和田桂子・松崎碩子・和田博文編『満鉄と日仏文化交流誌「フランス・ジャポン」』ゆまに書房, pp. 13-14.
- [38] 創立から1945年5月まで閑院宮載仁親王が総裁を務め、その後は高松宮宜仁親王が引きついだ。『日仏文化』(1974) 30, p. 5.
- [39] 前掲書, p. 8.
- [40] 河合, 前掲論文, p. 103.
- [41] 藤原, 前掲書, pp. 416-426.
- [42] JALUZOT Béatrice (2014), «Le rôle des juristes japonais dans la fondation de la Maison franco-japonaise», *Ebisu*, 51, pp. 9-16.
- [43] ジャリユゾ, ベアトリス (2013)「世紀末の卓抜した日本人留学生」小塚莊一郎訳『東洋文化研究』15, pp. 149-170.
- [44] 藤原貞朗 (2014)「リヨンと日本の知られざる文化交流と日仏会館」『ふらんす』89-1, pp. 15-16, 小野正昭「リヨン市若月通り」(http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/summit/lyon/waka_st.html) 2016年6月4日アクセス。
- [45] Sénat, «HONNORAT», (http://www.senat.fr/senateur-3eme-republique/honnorat_andre0070r3.html), 2016年4月12日アクセス。
- [46] 薩摩治郎八は、綿織物で巨額の富を得た薩摩治郎兵衛の孫で、戦前パリの社交界で芸術家たちとの交流し、なおかつ蕩尽のかぎりを尽くしたことが知られている。薩摩については、小林茂 (2010)『薩摩治郎八：パリ日本館こそわがいのち』ミネルヴァ書房、鹿島茂 (2011)『蕩尽王、パリをゆく：薩摩治郎八伝』新潮社。
- [47] 松崎碩子 (1995)「日本学高等研究所六十年の歩み：パリ大学からコレージュ・ドゥ・フランスへ」『日仏図書館情報研究』21, pp. 5-19, 松崎碩子 (2012)「パリ大学日本学研究所」和田桂子・松崎碩子・和田博文編『満鉄と日仏文化交流誌「フランス・ジャポン」』ゆまに書房, pp. 226-242.
- [48] 富井政章 (1932)「序文」『日仏文化』新2号, pp. 1-4.
- [49] その後、1959年にアグノエルを中心として新たに日本学高等研究所 (Institut des Hautes Études Japonaises) が誕生、1973年にコレージュ・ド・フランス所属機関となって今日に至る。松崎, 前掲論文, 2012, pp. 239-241.
- [50] フランク, 前掲論文, pp. 3-4.
- [51] 藤原 (2008), 前掲書, pp. 203-222.
- [52] 伊東, 前掲論文, p. 50.
- [53] 藤原 (2008), 前掲書, pp. 411-416.

(いぬかい たかひと 学習院大学国際研究教育機構 PD 共同研究員)

Japanese Studies in France from the Latter Half of the 19th Century to the Eve of the Second World War

Takahito Inukai

Abstract

This article outlines the development of Japanese studies in France from the second half of the 19th century to prior to the outbreak of World War Two, divides this development into three stages, and reveals the roles and networks of the main researchers, research institutes and academic organizations involved. Japanese studies emerged as a new branch of Oriental studies from the foundations of Indian and Chinese studies. The academic discipline and expertise therein developed gradually, and Japanese studies became established as part of “Far East” studies amid the expansion of the French colonies. After World War One, the research centers in France, the Indochina colony and Japan were linked through the foundation of institutions based on the political, governmental and business connections between Japan and France.